

光明第十四号 大正九年二月

様

(二月二十五日)
住岡狂風

□ 我去んぬる日より、悪性感冒にかかりて、今日にてはやほぼ十日となりぬ。されど今日はことのほか気持ち好ければ、起き出でて、今之を書き換えつつあり。

□ 旅の空に來たりて、病の床に臥したるほど淋しく悲しきはなし。愛しき教え子をも見ることも能わず。語らん人もなし。「ああ病は辛し、病は寂し。」と幾度思いしものぞ。されど又病はうれし。暇なくて、常に我を思う間なき身には、病の時ほど深く黙想し、冥想し得る時はあらず。

□ 唯一人看護る人も無く、病の床に臥せる身には、他人の真の一言葉もこの上なくうれしく思わるるなり。学校長の君、何くれとなく、気をつけて、労り慰めたまえることの身にしみて、有難くて涙ぐまれぬ。同僚の君たちの忙わしき中にも情の言葉うれし。人の情のしみじみと知られて、病も亦うれし。同胞の手紙の如何に我を慰めしぞ。

□ 四年生になりつる少女おとめ子手紙送りぬ、白く『先生御病氣でありますそうですが、ただ今いかがでございますか。なんぼかごふじゆうでございましょう。かげながら気づかっています。どうぞ早くなおるようには思っています。ごようじんなきいませ。さよなら。こんどごくらくでは、びようきもつきますまい。なむあみだぶつ、なむあみだぶつ』と。簡てみじかながら、可憐なる心知られて、あつき涙あふれぬ。鼓動高き胸に手紙いできて。

□ 病したため光明十三号未だ得送らず。三四日が内に送りたし。十四号もこれにて、書き了んぬ。牛うしば以上も刷りたれば数日の内に生れん。

□ 左に書きたる対話、心得違ひせぬように読まれたし。真面目なる青年の率直なる告白なり。

某青年との語り

青年「先生今晚は御邪魔にあがりました。今読書していただけるのでございますね。御迷惑でしょうか。」

狂風「いやかまいません。どうかこちらにお寄んなさい。何だか淋しい様な気のする晩です。よく来てくれました。」

青年「よく御勉強なさるのですね。さぞ楽しいことでしょうね。私たちはそんな身になつて見たいと思います。私たちには何でも深入りして読むだけの力が与えられていないのです。そして、毎日 毎日の雑業がしんみり物を思う時さえあたえてくれな

いんです。」

狂風「読むことは、私たちに与えられた最も大きい楽しみの一つです。僕たちの様に、簡単な生活をしている者から、読書を取りのけられたら哀れなものです。しかし読み得ないということも、一概に悲しまなくてもよいでしょう。もし時間もあり、読み得る力もあるのに、横着のため読まないのなら、無論悪いけれども、境遇のため、仕事のため、読めないのでしたら、責めるわけにも行かないのです。いや僕らもやはり、思う程読めないということに何時も苦しんでいます。」

青年「先生今晚は、たくさん問題を提げて解決をつけてもらいに来たのです。私は、近頃わからない問題がたくさん頭の中に一ぱいになっていきます。人生を真面目に考えよと何時も言つて下さいますが、何でも真面目に考えていますと、もう、そこら中が矛盾だらけの様な気がして、何が何だか解らなくなって来るのです。」

2

狂風「よく来てくれましたが僕に解決が出来ますやら。まあ共に、本当に考えて見ましょう。君は今矛盾だらけの様なと言いましたね。今まで唯生活に追われて、機械の様に動いていた一人の人間が何かのはずみに、その生命こころが人生とか我とかを真実に見ようとしたすと、そんな気のする時が来るものです。それが苦になることはその人には不思議な心で不思議な心を覚ましかけてるので、喜ぶべき事でしょう。そして君にはその時が来たのです。」

青年「私は苦しいのです。夜も眠られないことがあるのです。私の出会うことが皆道理になつていないような気がするのです。それでも私はやはり、何かしら求めたいような、見出したいような気がするのです。時には自暴が起きてもうどうなりとなれと言う気もするのですがやはり、私の心はそれを赦しません。」

狂風「人間の内で一番卑怯な者が自暴を起すのです。自暴は苦を苦しみ得ない、自分を自分で支へきれない弱い人間のする、男を棄てたやりかたです。人間には如何に苦しくて自暴を起すことは赦されていません。苦しい時には苦しむより外ありません。」

青年「先生は常に尊い人とか、尊い人生とかお言いになります、どうも私は尊く思われたいのです。第一世の中の人間は、唯毎日毎日、生きよう生きようとそればかりつとめています。百姓が土を掘っているのも、学生が勉強するのも、皆、今よりもつと楽に、もつと自由に生きようとつとめているのです。私には世の中は生きようとす

る人間の戦い場の様な気がします。人が求めている物は金です。金を得るためには

随分人間は残酷なこともしています。それでいて彼らは笑つて暮して行っています。何のともがめも受けないように。寺はありし昔を語る哀れな廃虚として残っているようです。道徳などがあるのでしょうか。世の中には、三年の間に、うんと何万円のお金を儲けて、立派になつていっているものがあります。つまり、商売などで、急に儲けるということは、人の持つべきものを上手な手段で取ることではないか。それなのに、貧乏人などは急に改まつて、言葉まで丁寧で、その悪人を奉つています。道徳なんて、実際あるものでしょうか。」

狂風「君の考え方は、あまり一方に偏つています。しかし、僕は君のその飾らない態度が好きです。君には親がありますね。親は大切なのでしょう。………そうです。親は皆大切で。君には真実 親の情が知れているでしょう。」

青年「親の愛ですか。時々涙が出る様です。」

狂風「涙ぐましいほど親の愛を感じている君には、親のことについて何も考えることはありませんか。」

青年「考えます。永生きしてくれれば好い。病気になつてくれねばよいが、その他色々考えさせられます。」

狂風「それは、親がいれば、自分が幸福だからですか。」

青年「いいえ、そんなことはありません。ただ親が幸福なればと思うのです。」

狂風「その心を、私も「孝」と言ひましょう。君は親のために幸福を祈ると言ひましたね。それなら、親には食わせないで君ばかり食べる気にはなれないでしょう。」

青年「僕は親にやろうと思つたら何でもほしくありません。」

狂風「親が悲しんでいたら……」

青年「慰めます。」

狂風「病気になつたら……」

青年「医者呼びます。何でも買つて食べさせます。悪いことは聞かせません。看病します。全快を祈ります。ああもう親のことは言つて下さいますな。今頃母がメツキリ弱くなつたのです。涙が出て悲しゅうなります。」

狂風「そこです。君が親に対してするその行いは「孝行」ではありませんか。君は、道徳はいらぬ物の様に言ひました。また、いい加減に人が造つたかの様に言ひました。それなら、何故親を思うのです。よく考えて見たら、君が親を思う、そして親のために祈る心は、君が勝手に構えてやろうと思つて出来たのですか。いやいや、君の力ではどうすることも出来ない、やめようとしても止められない、君の心の飾りけのない要求ではないか。時によつたら親に対して腹も立つだろう。しかしそれは君の本當の心ではなくて、やはり君には親を愛せずにはいらぬだろう。その心が形の上に出たのを孝行と言つては悪いでしょうか。」

青年「よくわかりました。親と僕との間には道徳があることはわかりました。しかし他人と他人の間には、道徳という仮面しかないような気がします。」

狂風「世の中には、君の考へているように道徳の仮面をかぶつた人が満ちています。しかし、それだから道徳はないとは言へません。悪い人間が何故道徳という仮面をかぶつているかと言うことなら考へて見なければなりません。一人人間は、自分一人で

はどうしたって暮して行けない様に出来ています。たとえ仙人だと言って、山の奥に入ったとて、着物を着ていたらもう社会の恩をきています。一口でも言葉を使ったら、もう仙人ではありません。その言葉は幾万年かの間に、社会に出来たものです。又仙人だと言って山に入る前までは家に住んでいたでしょう。人と交りもしたでしょう。食物も取ったでしょう。とすればその人は、やはり、社会をはなれては考えることの出来ない人です。人間は、この世の中即ち社会をはなれたら、人として考えることは出来ないのです。

とすれば、社会に恩を受けているのです。仏家では衆生の恩ということいいます。私たちは、この一切の物の恩の中から一足も出ることが出来ないでくらしています。この畳一枚も筆一本も戸一枚も米一粒も皆世の中から受けている恩であります。私たちからこの恩を残らず取りのけたら、私たちの体しか残らないでしょう。いやその体も今日までの恩がなかったなら、こんなに生きているはずはないのです。私たちの体も心も一切残らず恩のかたまりです。君はもし、隣の人から、歛一丁でも借りたら礼を言うでしょう。有難いと思うでしょう。しかし、この社会の恩にむかつて礼を言ったことがありますか。」

青年「そんなことを思ったこともありません。恩を思っていないことが何だか恐しいような気がします。私はどうしたらよいのでしょうか。」

狂風「恩に向つては感謝しなければなりません。その恩は、人間が世界に出て来た時から、ずっとあつたのです。その恩を思う心は、感謝の心にかわつて行きました。そして、恩を仇でかえすことは出来ない人間の心から、その恩に対しては、せめて仇を4しないこと、呪わないこと、いや進んでは、恩は恩でかえさなければならぬ、と人の心は美しく輝いたのです。そしてそれは何か、言うまでもなく、人のふむべき道であります。」

凡そ人の道は、決して一人や二人の人間が作ったものではありません。何十万年の長い間に、人の社会(他の動物には社会はない)に自然に出来たのです。そして、世の中が進むにつれて、一緒に進んでいるのです。誰一人として、この人の道に背くことは出来ないのです。この社会にいる以上は、決して背くわけには行かないのです。

仮面をかぶっている人は、その人の心の真実が、行くべき道を教えてくれるのにそれをきかないで、違った道を歩んでいるのをかくすために、道德の仮面をかぶっているのです。」

青年「それは恐しいことです。そしてそれを偽善というのではありませんか。」

狂風「偽善は殺人よりも罪が深いと言われています。実に人の子は自分の心の真実を守らない罪の上に、偽善の罪を上塗りしています。」

青年「何だかおかしい気になりました。私の考えはまちがっていました。人の世は何と恩知らずがみちていることでしょうか。あまりに恐しい。ゾットするやうです。私は私の心の奥が、私にむかつて言っていることを守らないで、勝手な方に行つてやろうかとも思いました。心の真実の叫びと、世の中とがあまりに矛盾しているので自暴も起きそうでした。もしその通りを進んだら、私は恐しい鬼になるところでした。ああ私はやつぱり生命の真の要求に従つて、淋しく苦しまねばならぬのですか。」

狂風「人になつて下さいとはそのことです。どうか、君は率直に、赤裸々に、自分の光を見出て行きなさい。そしてそれが君の宗教的生活です。人間は率直な心でさえいたら、きつと救われます。君は苦しいと言いました。そうです、苦しいのです。しかし、その苦しみは、尊い苦しみです。」

青年「何だかうれしい気がします。人に生れたことが幸福な様な気がします。」

狂風「人は、人間として、人生を考えないほど哀れな者はありません。人が生きている人生の目的を、理想とも言います。至善とも言います。或は又幸福とも言います。人が人生の目的を考えて、努力する生活を、宗教的生活と言います。率直に自分を、人生を見る人へのみ与えられる祝福されたる生活です。」

青年「先生、宗教的生活とは、寺参りをしている人たちの生活ではありませんか。」

狂風「寺参りをしている人たちの間にも宗教的生活をしている人は少ないでしょう。あの人たちの内に何人真実求めている人がありましよう。あの人たちは、一層の利己主義の人が多いのです。人としての自分も考えないで、人生は考えないで、極楽へ行くと、という利益を得ようと思つて居るのです。自分をはなれて、何か物でももらうような態度で居るのです。百年寺に参つたとて駄目でしょう。」

青年「しかし先生一切の救いは、あんな悪人に対しての救いではありませんか。」

狂風「それはそうです。一切の者は救はれて居るのです。いつたい人の子として、私たちは、悪を働かなければ生きられないのです。一日には、何度人を呪うかも知れません。私たちは生物ばかり食べています。私たちは、私たちが生活に害を与えるものは片端から殺しています。一日には何億の生命を取っています。しかし、それはしな5ければ生きて行かれないのです。それはほつておくとしても、先に、自分の心にスナホに従えと言いましたが、私たちは弱いのです。その弱さのために、スナホに従い得ないことばかりです。」

青年「私もそれを言おうと思つて居ました。私は隣の家の田に水をあてておきます。隣の家の爺さんは、それに礼を言うどころか、私の田の水をはずして、自分の田にあてました。私の心は怒りに燃えました。しかし、私の心はすぐ、駄目だ駄目だと叱りました。その時私の心は、礼を言つてもらいたさに善いことをするのではない。汝は善のために善をせよ、と一方では申します。その一方では、二度とよい事をしてやるものでない。礼どころか、我慾ばかり働く奴だと、二様に働きます。しかし、時間がたつにつれて、浅はかな小さい自分を見出して、悲しくなつて来ます。」

狂風「光明団の総会で話したと同じことです。私たちが苦しいというのはそのことです。煩惱の業火と、真実の自分との苦しい戦いです。親鸞は九才の時から、二十九才の時まで、この苦しみから逃れるために、二十年の間比叡山で学問したり、苦行したりして苦しんだのです。耶蘇は「なんじらの敵を愛しみ、なんじらを誑う者を祝し、なんじらを恨む者を善視し虐待迫害者のために祈祷せよ。かくするは、天に在すなんじの父の子とならんためなり。」と言つて、偽善と戦えと教えていますが、私たちに、苦しみおおせない弱さと、その苦にたへきれないために、倒れそうになる自分を見出すのです。私たちはその苦から逃げることを赦されません。とすれば……」

青年「それでは、人生はあまりに、不調和です。私の弱さを知り、苦に倒されそうな自分から逃れる道がないとは、それはあまりに惨虐むごたらしいです。」

狂風「とすれば人生はあまりに、不完全です。宇宙は不調和です。しかし、宇宙は円満です。絶対です。きつとここには調和がなくてはなりません。昼があれば夜があり、坂があれば必ず下りがある。善があれば悪があり、大があれば小がある。平均がなくては、調和がなくては人生は偽だ。調和がなくては宇宙ではない。罪があれば罰がある。苦があれば楽がある。呪いがあれば祈りがある。そして、我らには救済がなくはならぬ。親鸞は二十九才の時黒谷の源空のもとで、たつた一口この調和を聞いたのです。罪悪と同じ大きさの救済をたつた一口きいたのです。そして、救われたのです。」

青年「先生、私の考えていた宗教生活はあまりに打算的でした。あまりに難しいものでした。あまりに平易いものでした。人は皆救われているのですか。」

狂風「私は今君と談しています。二人の間には、呪いもありません。怒りもありません。冷静な心で飾りもなく語っています。そして二人の間には何かしら、温い空気がただよっています。言うまでもなく、私たちの間には、極楽と言うか、天国と言うか、とにかく自他円満に救われています。」

青年「それでは私たちはあまりに幸福です。外には車が通っています。あの車を引いている男も やはり救われているのでしょうか。」

狂風「救われているでしょう。悪い者で救われない者はないでしょう。」

青年「しかしそれでは、苦しむ必要はなくなつて来はしませんか。」

狂風「それはちがいます。露は月にむかえばどの露とて、月のうつつていない露はありません。また、たくさん列んだ田には、どれにも月はうつつていますが、しかし、たつた一枚の田にしこうつてはいないとも見ることが出来ます。どれにもうつつていて、しかも一枚しかうつつていないことを考えて見なくてはなりません。」

○子という方がいます。その人は「み仏様のお子で狂風兄様の妹」という真実の自覚をもっています。私たちは、全ての生きとし生けるものと皆同胞なのです。しかし、自覚がなければ安心がありません。皆救われています。しかし、

青年「結局、その人にとつては救はれていないことになりますね。」

狂風「宗教のことは、真面目に考えなければなりませんね。つまり真面目に自分を見る人のみ救いに近よります。これ以上は宗教家にたづねることです。」

青年「先生はまだ独身ですか。」

狂風「そうです。」

青年「人間は一生独身でいることは罪悪でしょうか。」

狂風「色々に議論がわかれていく様です。妻があつて、子供がある生活が、普通の人の道行きで、人間本然の要求から言えばそれがほんとの生活でしょう。」

青年「結婚した男女らは幸福を感じているのでしょうか。」

狂風「さあ……苦しんでいるのが多いでしょう。結婚して、一年二年は、皆幸福を感じずるでしょう。しかし、その間は多くの人たちが甘い夢を見ているらしいのです。」

真生活は、その甘い夢が醒めて、その後の生活です。しかし、その時になって、やはり幸福を感謝し得る者がどの位ありましようね。」

青年「先生も結婚なさいますか……近い内に。」

狂風「わかりませんね。誓うことも人間には、もともと赦されていないことです。」「今年だか、五年先きだか……一生ないか。」

青年「先生あの……恋とはどんなものでしょう。」

狂風「どんなものでしょうかと、……もつと率直に……」

青年「してもいいものでしょうか。してはいけないものでしょうか。」

狂風「どちらとも言えないでしょう。恋そのものは善いことも悪いこともないものと思います。ただしかし、恋には、罪悪がたくさんつくのが普通です。罪悪のつく恋をしてはなりません。」

青年「先生私は、私たち青年仲間が集まると、きたない女の噂ばかりです。その話を聞かされたり、彼らのする醜悪な安価な行いを見せつけられると腹が立ちます。否動物の様な彼らが哀れになります。それなのに、私はやはり女のことについて、苦しんでいます。やはり理屈にあわれないのです。矛盾を見出すのです。私の心は何故こんなに矛盾に苦しまねばならないのでしょうか。」

狂風「人間は、きつと一生に一度は恋に入らなければならぬ運命をもっていると言つたらよいでしょう。これは、やはり、如何ともすることの出来ない人間としての運命の力が人間に強いるのです。しかしその時機は人間にとつては、危ない時機です。この危ない閑所の通り方一つで、その人の一生は定まると言つてよいでしょう。7

無智な犬のような哀れなそこらの青年たちは、この危ない時機に、苦しまないで、考えないで、唯本能的に、衝動的に、まるで動物のように歩んでいます。君が腹が立つ、哀れに思うと言うのは、そんな哀れな、盲目的熱情の奴隷になつている青年の無自覚に対する哀れさです。それでいて、君は恋を知つて苦しいと言います。君も亦その危ない時機に立っているのです。運命としての大きな力が君に強いているのです。私は君の幸福を祈ります。君も亦この閑所を無事に通過なくてはなりません。」

青年「罪悪がつくとおほせになりましたが、罪悪のそわない恋をしようとすれば……」

狂風「人間は、自分の周囲の平和を破つてはなりません。世の中の悲しい出来事は、誰かが平和を破つたことが原因になることが大方皆です。友人の信義がかけたら、その恋は平和を破る罪悪のついた恋です。そして、度々言つたように、人を誣う心は、地獄のあらわれですから。呪うことは、人にはゆるさされてはいけません。君の恋にも呪いが添つてはなりません。如何な理由があつても、君の愛する女にも周囲の人にも呪いをかけてはなりません。」

青年「たとえ運命が私の手からその女を取つたときでも。」

狂風「もちろんです。やはり、その人の幸福を祈らなくてはなりません。」

青年「私たちには、出来ないことです。……ああ苦しい。」

狂風「ある男は、妻の髪を切つたと聞きました。ある男は、妻の貞操を疑つて殺しました。セクスピアの作つた劇にオセロというのがあります。オセロは英雄でした。」

オセロには、デスデモナという美しい恋仲の妻がありました。深く愛しあつていましたが、或時オセロは、最愛のデスデモナの貞操に疑いをいだいて、切り殺してしまいました。そしてその殺すとすぐ、デスデモナの正しいことが知れて、自分もその妻の後を追つて自殺しました。それもこれもみな呪いがついています。恋という入物の中には罪悪が一ぱいです。」

青年「先生、さつぱりわからなくなりました。私は恋を知らなければならぬ様に、人間として、本能的に恋を知るように強いられていて、そして、その恋をすれば、罪悪はその中に満ちている。ああ何という不調和でしょう。矛盾でしょう。私の一生は呪われています。」

狂風「それは、人間としての不調和です。しかし、そこにもやはり救いがあります。その矛盾その不完全をも、覚めれば必ず得る救いがあります。口では言えないことです。君はやはり真面目に、あなた真実の叫びをきいて、率直に、進んで行きなさい。決して、言い訳を見出して、横道にそれて、快樂を追うてはなりません。唯その苦しみを真面目に苦しんで行きなさい。君のように、純な人のみがもつ大切な苦しみます。大切に育ててお行きなさい。君は救われています。」

青年「私にはよくわかりません。しかし、今晚はうれいような気がします。探ねていたものを得たような気がします。先生と別れたくないような気がします。」

狂風「僕も兄弟の様な気がします。あなたも亦私の愛の圈内に入った人です。人は皆飾気なく真実の心をさばき出した時だけ、愛を感じます。修養の足りない人は、真実の心と放縦とをまちがえます。親しむ心を舐れる心と同じに見る者があります。君には真実と親しみがあります。君のその謙遜の態度がこの上もなくうれいのです。君のような純な人はきつと祝福されます。」

青年「有難うございます。かえつてよく考えて見ましよう。そして、一週間の内には、きつと又御邪魔にあがりたいと思ひます。先生の御勉強の邪魔をして相すみません。赦して下さい。」ではこれでいとま致します。」

狂風「また来て下さい。多くの青年も君のような態度であつてほしい。ではさよなら。」

(二十日ほど前に来たある青年との実話です。二月十四日の夜一夜にこれを書いてしまいました。)